色ってなんですか？

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
色ってなんですか？

【Ｎコード】
Ｎ１６８２Ｔ

【作者名】
名無し

【あらすじ】
神下紅也今年で高校三年生
性格に難あり、彼の見る世界はすべて灰色、何もかもに退屈した毎日を送っている、運動神経もよくすぐに出来てしまうから飽きてやめる、すべての部活を回り１週間もった部活はない
ＰＣにも優れた知識を持っており、まぁ・・いろいろ出来る
そんな彼でもなぜか雨だけは灰色に見えないだから彼は灰色に見えないものが好き

両親を事故で亡くし、株で儲けた金とその才能から独りで生活してる
そんな彼を変える一通の間違いメール

プロローグ

あ～退屈
毎日同じ授業くだらない話質問されるのは俺だけ
先生も腐ったもんだな
どっかの漫画みたいに世界を変えてやろうとは思わないが
そのぐらい頭は良いと自分で思う、何もしなくてもどうせなんとかなるさ

最初だけ俺の説明をしてやろう
一度しかしないし本当はしたくもない

やめた

やっぱしないわ

どっかで誰か聞きにくるからな
それ参考にしてくれ、一人だけ、俺に質問ばっかしてくる
アホのように見せかけてる
少し頭の良いやつがそばに居るからな

そいつぐらいかな、まぁオプションさ、一人でもいいが
世間体も大切にしないといけないから友達ぐらい作らないとな

そんな俺の最後の高校生活
見たいやつだけ見てくれればいいさ

嵐の前の静けさ（前書き）

月一で更新かもしれませんがよろしくお願いします

嵐の前の静けさ

ゴールデンウィークも終わり、初夏を迎えようとする今日、俺は衣替え前のこの制服にウンザリしながらこの坂を登る
山の上に学校を建てる意味が分からない、内陸部なのだから何を恐れているのか分からない
おかげで、自転車で来るものはおらず、皆こうしてウンザリしながらこの坂を登る、しかしどの世界でも例外はいる
もう2、3分したらニコニコしながら奴が来る、まったく、なぜ俺はこんな奴とつるんでいるのやら

「よ〜!、今日もカッコイイな」
きた、今日はこの台詞か、この前は勉強教えてだったか、とにかくこれで一週間はこの台詞を聞く羽目になった
いつもどおり俺が無視、でもそいつは喋り続ける、
「休日何してた?」
教えるか、それを聞いて何になるんだ、それで話を膨らませるって魂胆だろうな、しかたないが、ここは話してやろう
「課題と買い物ぐらいだな……株はまだ変わらないし」
あ〜、親は事故っていねぇ〜から俺の収入源は株と国からの金ぐらいか
料理もできるし、金は有り余るほどまぁ、色々やってるから言えないけどな、
「ほほう、そこら辺が皆と違うねぇ〜、買い物姿の紅也も見てみたいな」
株に突っ込まないところは褒めてやろう、寝てないせいか、口が軽い……

「見せねぇ、お前だけには見せねぇ」
「あら厳しい」
どっかのオカマか、俺までそんな疑惑が挙がりそうだからやめて欲しいな
「朝からうるせぇな」
「それは褒め言葉？　嬉しいな～，」
そろそろウザイ、そう思ってくると奴も気付いたのか喋らなくなる、そこら辺が普通の奴らと違う、だから俺もこうして少しだけだが話している、たまに面白いな、俺の想像を超えてくる奴には感心がある、それ以外は空気も当然……ふっ、俺もどうかしてるな

「おはよ～皆さん、上城静則のとーじょー」
俺の隣でそれをするな、でも俺はそんなのお構いなしで教室に入り席に着く
「俺はそんなキャラじゃない」
どうでもいいがその入り方は流行らないし流行らせない
「だっていつも一人じゃん」
「お前の考える一人と俺の考える一人は違う」
こんな奴らより面白いのを知っている俺にとってこの日常は退屈極まりない
「はぁ、じゃあ聞くがなぜ俺だけに話してくれるんだ」
それは何度お前に言えばいいのかと聞き返したいがここは抑えよう
「お前が勝手に話しかけてるだけだろ、そのままだと鬱陶しいからこうやって相手してやってるんだよ」
「俺以外にも居ただろ、そいつ等は？　」
「何度も言わせるな、残ったのがお前だけなんだよ」
こいつは記憶能力もないのか、いや、あるんだろうけどワザと言ってるのか、
相変わらず授業はつまらない、ふと窓の外を見る、いつも通りの

空、少し違うか、同じ空などない、
でも俺の目には灰色にしか見えない、
教室も人も、あいつ以外だが灰色、退屈極まりない、そろそろ質問が来るだろ、

「部活行こうぜー」
授業が終わるとこの調子、俺たちはカップルか、部活って言っても俺は株の操作しかしないし
お前はあの馬鹿とボードゲームでもしてるんだろ、アレのどこが部活なんだよ
「言われなくても行くさ、」
家でパソコン付けっぱなしも勿体無いから学校を利用してるだけだし、USBだから情報が漏れる事もない、
部室はエアコンも付けてもらっているので基本快適に過ごすことが出来る

俺たちは部室に付いた、扉を開けるとあの馬鹿はいた
「よ！」
「早速始めようぜ、今日こそは俺が勝つ」
こいつは池田　臨（のぞむ）、上城にゲームで勝つところからしてこいつもかなり頭が冴えるらしいが
それ以外はとにかく馬鹿、何考えてるのか分からない、負けるの嫌いな俺はこの馬鹿と勝負するのがいやだから、とにかく避けている
こいつにゲームで勝てる気がしない、
「じゃあ俺はPC使っているから、好きなときに帰るからな」
取引が終わると俺は帰るから、それまで皆ここに居る、いつもよく最後までゲームして飽きないのか、いつも疑問に思う

「また負けたー」
今日も上城の負けか、そろそろこっちも終わるし、この株売って
今日は終わるか
「帰るからな、」
「えぇ～これからなのに……これは明日にお預けだな」
「べい、帰ろー」
その名前で呼ぶな、この馬鹿
「俺はべいじゃない、紅也(こうや)だ」
「どっちでもいいじゃないか、言っても臨はべいって呼ぶしな」
言ってなかったが、こいつは女だ、そういう関係に見られるだろ、
そんなことも分からないのか
でもこいつも、この部室も少しだけ灰色じゃないからここに居る
だけだ、なんでよりによってこいつらなんだよ……

「とにかく帰る、鍵を貸せ」
こうして部活も終わる、授業なんかよりは少しはマシだが、なん
か調子が狂う

「明日は絶対勝つからなー、絶対」
「負けないよーふふ」
はぁ……なんでこいつらと帰ってるんだよ、そんなこと言いつつ
も今日も帰っているし、

「じゃあな」
こうして言葉まで交わす
「またねー」
「また明日なー」

俺の家は、不動産の弱みを握ってからこのマンションにほぼタダで住んでいる
そうは言っても電気水道ガスと言った生活費はかかるけれど、家賃がないのはありがたい
「ただいま、」
玄関にはなぜか親の写真が置いてあり、それに向って話しかける、おれはパソコンのスイッチをいれた

紅≪ただいまです
≪お、誰か来たと思えば、紅さんですか、
紅≪早いですね、今日は何していたのですか？　リッパーさん
リッパー≪名前を隠しても分かりますかね普通
紅≪この時間は貴方しか居ませんからね
ここは俺が作ったチャットルーム、顔も名前も分からないが少なくとも賢い奴がここに居る
ある有名なサイトにここの入り方を書いたところこの人以外にさまざまな人がここまでたどり着いた
入り方と言っても普通の人にはわからないアナグラムと、かなりパソコンに詳しくないとここにはこれない

リッパー≪まったく参りますな、今日はこれといった情報が入りませんでしたから
紅≪平和ということですね
リッパー≪退屈ともいいますかね、
リッパー≪珍しいことですよ、何も起こらないという事がね
紅≪嵐の前の静けさってやつですかね
リッパー≪嵐が分かれば、それなりに紅さんも儲かるんじゃないですか？

紅≪ｗｗｗｗ、今でもう結構十分ですよ
　正直有り余るほど金だけはある、だからこうやってパソコンも何台も使って世界の動向やニュースを見ている
　そうそう、あの漫画に出てくる探偵さんみたいな、パソコンは何台もあったほうが良い、一台では出来ることが限られてるからな
　しかもまだ学生だから税金もかからないしな、
リッパー≪学生はいいですなー
紅≪退屈なだけですよ
リッパー≪もう部活はお辞めに？
紅≪あの部活だけ今まで続いていますよ
リッパー≪そうですか、あの二人は紅さんに合ったんですね
紅≪そういう事にしときます
　ここでは俺は基本お喋りだ、独りが退屈だからこんなものを作った
　俺だってまだまだ未熟者、世界の事なんかこれっぽっちも知らない、だから面白い
　無知である事が何よりも恐ろしい、誰かもこんなこと言ってたな、だからこうやって世界を知るために俺はこうしてこんな変なものを作った

リッパー≪それでは、私は出かけますので
紅≪何か用事でも？
リッパー≪そういうのは聞いてはいけませんよ（笑）
　この人いったい何してるんだ？　かなりの情報屋なのは話で分かるけどそれでも地位は真ん中より上ぐらいだろう
紅≪今日は珍しく誰も来ませんね
リッパー≪そのうち来ますよ、それでは
　リッパーさんが退出し俺は画面を切り替えた

kill メール　？（前書き）

毎月更新なので長めにしました
ここからが本番です

kill メール　？

≪誰か居ますか～？
　いつもと変わらない日常、このチャットの会議を作ったは良いが基本自由だしチャットの記録も残らない
　久々のチャットが来た、誰だろ・・・・・・時計は深夜1時を回っていた

紅≪居ます
ドイル≪紅さんでしたか、
紅≪皆さん忙しいようで、なかなか皆さん集まりませんね
ドイル≪そろそろ集まりますよ

　ドイルさんは多分警察系、それもかなりの頭脳と知識、キャリアかな？　ここに居るメンバー同士あまり散策しないが、
　皆若いことはハッキリしている、そしてかなり暇らしい
龍≪今日はまだ二人だけですか？
ドイル≪この時期は色々忙しいですからね
紅≪学校は一番だるい時期ですけど、社会はそうじゃないんですね
　五月病だが梅雨で気分が乗らないだの、そんなの理由付けにしかならない
龍≪忙しいって言うより、指導とかで気が滅入るんだな

　龍さん、この人も若い、どうやってここまで来れたのかまったく分からない、演技でもしてるのかな？
ドイル≪私もですよ、新人がなかなか仕事を覚えなくて、疲れます
龍≪ドイルさんもですか、私のところは特に扱いのめんどくさい奴ばかりですから
　なんだか二人は似てそうで相反する存在かもしれない、龍さんっ

て……もしかして、
紅≪こっちは相変わらず、時間を持て余してます
リッパー≪時間は有限だから、何もしないのは損ですよ、皆さんお揃いでお久しぶりです
紅≪お仕事は終わったのですか？
龍≪何か良い情報でも？
リッパー≪それがですね、今回はものすごい物が釣れました

俺の胸の鼓動が速まった、退屈してた日常を変えるものだと直感した、
そしてその情報はこれから始まる、俺の日常を変えるものとなった

ドイル≪なかなか興味深いですね、私も興味がわいて来ました
リッパー≪皆さんはｋｉｌｌメールをご存知ですか？
（ｋｉｌｌメール？　殺人メール……だと？　）
背筋が凍るような感覚、しかし興味がそれをかき消す

龍≪聞いたことありませんね、ですがなかなか物騒な物なのは分かります
ドイル≪それなら聞いたことがあります、そのメールが来ると死を回避できると聞いてますが
リッパー≪私もそうだと思ったんですが、これがとんでもない事になりまして
紅≪死を回避？
ドイル≪はい、例えばいきなり「一キル」というメールが届いて、目の前をトラックが通過したり、のちに逮捕される凶悪犯が通った

りと様々ですがとりあえずそのメールが来なければほぼ何かのトラブルに巻き込まれるのです、しかも死に近い
龍≪それって深く考えると怖いですね
リッパー≪そこなんですよ、誰が何のためにそんなことしているのか、その情報が分かりましてね
ドイル≪・・・

リッパー≪死んだんですよ、しかもそのメールには助ける文章ではなく、どうやって死ぬかが書かれていたんですよ
龍≪はぁ！？！？
（なん……だと……）
ドイル≪その情報はどこから？
リッパー≪それは言えませんね、あなたが誰か教えてくれたら別ですけど
リッパー≪・・・
龍≪どういうことですか？　死を回避してくれてたんじゃないんですか？
紅≪殺人に変わった……のか？

リッパー≪このことはもうすぐ表沙汰になると思います、
表沙汰？　どういうことだ？　なんでそのことをリッパーが知っているんだ？
リッパー≪だから皆さん気をつけてください

次の日、リッパーの言ってたことが真実になった、ネットのニュ

ース一覧はそのことでいっぱいだった、名前も【ＫＩＩメール】……リッパーの言ってたやつだ、名前も同じなところを見て、リッパーは新聞記者かな？

「くそ……」

そんなことってあるのか？　死神でもなったつもりか？　疑問ばかりが沸く、こんなことは今までない、退屈な毎日から向けだせるかもしれない、こんな本の中でしか起こらなかった事が現実になるとは、

「よ！　いつも何考えてんの？」

考え込みながら学校に向う俺は、上城が隣にいるのに気が付かなかった、何か聞きたそうにしてたが俺はいつもどおり教室に向った

「おまえ……最近変なメール来てないか？」

退屈な授業も終わり部室に行く途中ちょっと気になって聞いてみた、その瞬間上城の表情が変わった、もしかして……

「おい、しず……」

この名前で呼ぶのも何ヶ月ぶりなのか、名前で呼ぶなんて俺も動揺してんのか？

「紅也……俺、」

こいつが名前で呼んだのは臨と会った時だったと思う、

「ちょっと携帯見せろ！」

俺は静則のかばんを無理やり取ろうとしたが、静則の表情を見て俺はやめた、

「すまん、部室行くぞそこで聴くからな」

「あ……そうだな」

俺たちは臨のいる部室に歩いた、その時間喋ることもなくたった数十秒、部室に着くまでことがものすごく長く感じた

「よ」
部室には臨がいつも通りそこには居た、
「べい、今日は静の様子がおかしいよ、喧嘩でもしたの？」
だからべいって……一瞬沈黙の空気が部室を走る、俺は何も言わずパソコンの前に座った
「今日はゲームしないのか？」
ふと俺から話しかけるほど二人は何も始めない、やっぱり上城にはきちんと聞いたほうがいいのか

「あのさ」
「メールなんて来てないよ」
俺の声を遮るようにそう言って臨とゲームを始めた、いつものこいつじゃないのは確かだが明らかにおかし過ぎる、
「なんだよその言い方」
「いいだろ別に、きてないんだから、」
少しイラッときた、心配なんかやっぱりするもんじゃないな
俺は画面に眼を戻して、キーボードをカタカタと叩いた、今日も何も変化なしつまらないな、
ｋｉｌｌメールが世の中に広まってる感じは今のところない、あんまり大騒ぎにならないのが意外だった、雑誌やネットで出てるだけでテレビではあんまり出なかったような気がした、
「待てよ……」
第一そんなものが本当に存在していいのか？　もしかしたら情報規制か操作が入ったかもしれない、
少し家に帰って皆に聞いてみる……いや、あんまり信用できない、頭をフル活用する、

「帰る」
「え？」
「べい、今日はいつもより早いよ」
二人ともポカーンとしている、まだゲームも始まったばっかりだった
「何かあったら、連絡しろよ」
俺は部室からでて少し足早に家に向った、歩きながら考える……
あの人たちに聞いて何か分かるのか？　この前のチャットが気になる
リッパーは明らかに何か知っている、ドイルも少なからず関係してる

「ミスった……」
今帰っても誰も居ないんだった・・・・…そう気付いたのは扉に触れた時だった、しかたない
もう一つのほうを使うか……

紅≪誰か居ますか？
十≪はい
熊≪おなじく
城≪いつもの3人で暇してました
紅≪お前ら暇人過ぎるｗｗ

この三人は暗号の本当の意味を理解したかなりのつわもの、素性検索も無し、ただ会話をしてるだけ
紅≪さっそくだけど
十≪何かあったの？
城≪この時間は珍しいね
紅≪皆さん・・ｋｉｌｌメール知ってますか？
熊≪・・・

城≪どうかしたんですか？
熊≪いや、聞いたことはありますが
十≪訳ありですね、僕も知ってますとうとう人殺しまでいったんですよね
城≪らしいですね、
紅≪皆さん知ってましたか、でもなぜか広まりませんね
城≪情報操作されてますね
十≪本当ですか？
紅≪俺もそう思ってました
城≪情報操作はさておき、なぜメールが来るかが分かりました
十≪本当ですか？
熊≪！！？？
城≪原因はハッカーによるアドレス強奪の可能性が高いです、
十≪そんなことが可能なんですか？
紅≪実際ＰＳＮのこともありましたし、

俺も誰かのＰＣに侵入とかはできるし、ブロックが甘い人はいくらでもいる

熊≪皆さんには来てないですよね
十≪はい
城≪来てませんね、まずハッキングられるようなやわじゃないでしょここにいる人はｗｗ
紅≪俺の友達が来た可能性があります
十≪！？！？
城≪マジですか・・

まだ本人から聞いてないけどあの言い方はあいつらしくないしな、なぜ言わないかが気になるけど今はおいておこう

熊≪どうするつもりですか？
紅≪もちろんタネはあがってるんだからこっちから
十≪それはやめたほうがいい
城≪相手の正体がかなり凄腕のハッカーだからな
紅≪でも・・
城≪紅さんのもハッキングできるならわかるでしょ？不可能が無いことを

そう言われれば何も言い返せない……確かに相手が何を仕掛けてくるか未知数すぎる、この中は大丈夫だと思うけど、油断は出来ない
そしてそんなことを考えてると、実際に起きてしまうってことを改めて思わされた

「ん？」
携帯のメール音……心拍数が上がるのが自分でも分かる、もしかして

『頭に乗るな』

たった一言のメール、メール先は分からないように適当な会社のダイレクトメールだろう、背筋が凍るような感じがした
もしかしたらこの会話もバレてるんじゃ、三人の身を心配したが

今のところそんなことは言ってないし大丈夫なのかもしれない

城≪紅？

十≪いますかー？

　あまりにも反応の無かった俺を心配したのかチャットをとばしてきた

熊≪何かあったの？

紅≪メールが来た

十≪え！？

城≪ｋｉｌｌか？

紅≪いいえ・・警告のメールです、もしかしたらここも筒抜けかもしれません、この携帯は壊しますので後でメアド送ります

　俺は携帯を二つに折った、別にいい……代えの携帯はいくらでもある、問題はなぜバレたかだ

熊≪これからどうします？

十≪ここも筒抜けじゃあ埒があきませんね

城≪何かあったら個通で、それならバレないでしょう

紅≪では一時解散ということで

≪退室しました≫

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1682t/

色ってなんですか？

2011年10月8日20時34分発行